

イセばっちゃんをたずねて

～網走脚本取材旅行記～

オフィス夢実子

目次

No.1	『新作！「中川イセ物語（仮題）」によせる想い』	… 3
No.2	『網走市へ脚本取材に』	… 6
No.3	『ドキドキの旅立ち』	… 7
No.4	『イセばっちゃんをめぐる人々』	… 9
No.5	『イセさんの見た景色』	…12
No.6	『いせの里をたずねて』	…13
No.7	『網走市前市長にお会いする』	…16
No.8	『網走市現市長を表敬訪問』	…18
No.9	『どこの馬の骨だ』	…21
No.10	『中身がないとダメだ』	…23
No.11	番外編 『おら負けね』	…26
No.12	番外編 『かめおかゆみこさんのメルマガ』	…30
奥付		…32

No.1 『新作！「中川イセ物語（仮題）」によせる想い』

山形の女を物語るシリーズ 第2弾！
語り劇「中川イセ物語（仮題）」



☆ 夢実子の想い ☆

「地方で、芝居で食っていく役者がいてもいいじゃないか」

と、いう想いから、平成 10（1998）年東京から地元・天童に戻ってきた私、夢実子（本名：今田由美子）は、その当時、上演作品を模索する中、山形県の大井沢出身の女医・志田周子（しだちかこ）さんの記事と出会う。山形県の大井沢出身の女医・志田周子（しだちかこ）さんの記事と出会う。



志田周子（しだちかこ）さん
僻地医療に携わり、54 歳という
若さで夭折。その献身的・情熱
的な生涯を知るにつけ、「この
人に、もう一度光をあてたい！
私が演じることで、舞台の上に
『生き返らせたい』という想い
にかられたのだった。



平成 13（2001）年 12 月 1 日

志田周子さんをモデルにした
ひとり芝居「真知子～ある女医の物語～」上演をスタート。



10年間の上演活動の中ラジオドラマとしてもとりあげられ、その後、ひとり芝居から”語り劇”にスタイルを変更。現在も全国で上演活動を展開している。

そして、そろそろ新作を…と考えていた矢先に出会ったのが、地元・天童市を出生とする「中川イセさん」だ。

☆☆

明治 34（1901）年東村山郡干布村上荻野戸（現在の天童市上荻野戸）生まれ。

娘の養育費のために北海道へ渡り、網走の遊郭へ。

昭和 22（1947）年戦後初の統一選挙で、初の女性議員第 1 号。7 期 28 年間にわたり議員として活躍。

社会福祉法人網走愛育会理事、網走監獄保存財団理事長を歴任したのち、網走名誉市民となる。

平成 19（2007）年 1 月 1 日没。享年 105 歳。

☆☆

中川イセさんに魅かれたのは、単にその経歴の華々しさからではない。



どんなときも、希望をうしなわず、いつでも、前向きに、創意工夫をこらしながら、自分の人生を切り拓いていく、行動力。そして、周囲を包み込む、深い慈愛の心。

現代に欠けているものを、イセさんは、すべて備えているように感じたのだ。

そんな想いに駆り立てられ、平成 26（2004）年、横浜語り劇公演の際に、中川イセ半生記「岬を駆ける女」（山谷一原著）の数ページを抜粋して、「中川イセ物語（仮題）予告編！」として朗読した。

そこに同席していたのが、作家・かめおかゆみこさん。奇しくも、網走市に実家を持つかめおかさんにとっても、中川イセさんは、魅力的な存在と映ったようだった。

イセさんの物語を「語り劇」にできないか。
さっそく、資料調べが始まった。

そんな中で、イセさんのご縁で、天童市と網走市が、友好都市になっていたこともわかった。

網走市の発展のために尽力したイセさんは、
故郷への想いも厚く、何年にもわたって、自身の母校や、
地域の小学校に、図書の寄付などを行っていた。

網走市に実家を持つ、かめおかゆみこさんが脚本を書き！
天童市出身（在住）の夢実子が演じ物語っていく！
北海道×山形のオリジナル作品ができるはず！

「これは、私たちがやる意味があるよね」

かめおかさんと私の想いが合致したのだった。

ひとり芝居「真知子」の時と同様、金なし、コネなし、
仲間なし。あるのは、”身ひとつ！”と”熱い想い！”
まさに、裸一貫で北海道へ渡ったイセさんの物語を創って
いくのに、ふさわしいスタートである。

平成 27(2015)年の網走公演を皮切りに、全国公演を目標に、協力して下さる方を幅広く募集する事にした。

No.2 『網走市へ脚本取材に』

12月、作家・かめおかゆみこさんと一緒に網走市に脚本取材に行くことを決めた。



※天童市立荒谷小学校創立50周年記念誌より（私の所有の冊子です）

たまたま夢実子（今田由美子）の出身校にイセさんが図書を寄贈なさっていたことから、ご逝去のあと、イセさんのお

孫さんが、わざわざ訪ねていらしたことを知った。

面識もないのに、劇化の許可をお願いしたところ、快く許諾をいただいた。

また、その後、網走市でのご縁が繋がりに、イセさんにゆかりのある方々に直接お会いして、取材させていただける運びになったのである。

さらに、ご縁からご縁が繋がって、天童市長にもご挨拶に伺わせていただくことができた。

なんだか、イセさんが、あちらで、采配をふるって下さっているのではないかと思ってしまうほどの、嬉しいスタートだった。

この流れが良い方向に進まないはずはない！と、根拠のない自信が、私を突き動かしている（笑）

現地との調整の結果、網走市取材は、12月5日～8日と決まった。

No.3 『ドキドキの旅立ち』

12月5日（金）、いよいよ、語り劇『中川イセ物語（仮題）』を創作するために、かめおかゆみこさんと網走市へ取材旅行へ向かう。



山形では、前日まで吹雪いていた天候も朝は落ち着き、私は山形空港から羽田へ何ごともなく出発し、かめおかゆみこさんとは羽田空港で合流し女満別空港へ。

飛行機に乗るのは何年ぶりだろう…。

ひさびさの飛行機に緊張していた私は、飛び立ち到着するまでドキドキではあったが、意外とすんなり（数時間）行き過ぎて、雲の上から地上を上機嫌で楽しみ始めた。



雲の上から地上を見下ろし、ミニチュアのように見える家々や道路を眺めていると

「人の落ち込みなんて小さいことだな〜」とか、「あの人がどうだ」とか、「こんないやな思いをされた」とか、

マイナスな感情や思いは、なんだか考えること自体「くだらない！」と感じてくる。

そんな事よりも「やりたい事を実現するためにはどうやったらいいんだろう」とか希望とか、夢とか、前向きに自分の人生を歩いて行こう！って。

明るく、元気に、楽しく、嬉しく、健康な人たちしか私の周りにはいないのだ！そして、私自身も。そういう気持ちメラメラと湧き起こってきたのを感じていた。

そんなことを考えたのも、人さまから言われた事で落ち込んだり、立ち上がるのに時間がかかってしまう過去の私がいたからだ。

そんなものにふりまわされる時間を使うのをやめた！

わずか数時間のフライトが、そういうことを気付かせてくれたのだ。



そんなことを感じながら、想いながら、考えながら、顔がほてってしまうほどの太陽光線を窓外に見ながらあっといふまに女満別空港へ到着。



写真は、光岡夫妻と私とかめおかさん

さて、この日は、中川イセさんのお孫さんにあたる光岡光彦さん宅へおじゃまし、イセさんと娘の愛子さん（光岡さんの母）と一緒に並んだ写真などを見せていただいた。（イセさん愛子さんはソックリ）

その後は、今回の取材旅行でご尽力いただいた方々と、顔合わせをかねて会食をしながらお話を伺う事になり、初日から、イセさんパワーなるものをガンガン皮膚で感じる事となり、私たちの取材旅行の良きスタートとなる。

網走滞在中は、かめおかゆみこさんのご実家にお世話になることになった。



No.4 『イセばっちゃんをめぐる人々』



12月6日（土）、朝起きると、美しい朝焼けの光が目飛び込んできた。

宿泊先のかめおかさんの実家の窓から、その光は差し込んできていた。見ると、遠くの山から、朝陽が顔を出したところだった。窓から見えるその景色は、まるで額縁におさめられた一枚の絵画のよう

だった。

雪はまったく降ってない12月の網走。

この日は9時半から、博物館「網走監獄」の会議室にて市議の方や保護司の方々から、午後は御親戚の方々から、生前の中川イセさんのお話をお伺いした。



※写真は網走市市議会のみなさん・保護司・ご住職のみなさまです。

右上の写真は、博物館「網走監獄」理事長時代の中川イセさん

『ばっちゃんは、ただ居るだけで何かを教えてくださいました』

『ばっちゃん存在が道しるべ』

『型破りの凄い人で、並みの人と器が違いすぎる女性（ひと）だった』

『ばっちゃんは、身内にはきびしかったね』

『他の人がお年玉もらっているのに、私はもらえなかった。』

『子供心にきずついたのでよね（笑）』

『飾らないで、素のまま生きなさいって言ってくださって勇気をいただいたの』



※写真は御親戚関係の方々
です

中川イセさんが、市議をしている時代の武勇伝とか、身内からみた、厳しい中にも温かいおちゃめなイセさんのお話を伺う事ができた。

みなさんのお話の中に、
今もちゃんと『中川イセ』『イセばっちゃん』が、確かに生きていた。もう、現実にはいないのだけれども、私の目の前にいるような、なんだか昔から私も「ばっちゃん」の事を知っていて、めんこがられて（笑）「おもいっきりやれ！ ほしてもっと頑張れ！」って励まされているような錯覚を覚えながらお聴きした。

そして、小声で「ばっちゃん」って、
親しさ込めてつぶやいてみた…。

なお、この日は、北海道新聞の取材もいただいた。
若い記者さんだったが、熱心にうなずいて話を聞いて下さった。

初日もそうだったが、本当に最初から最後まで、感謝につぐ感謝の一日だった。

No.5 『伊セさんの見た景色』

夜はしばれる網走でも、朝は昨日と変わらない晴天だった。12月7日（日）、この日の朝も気持ちのよい朝陽をみてスタート。



階下に降りると、かめおかさんが「夢実子さん、載ってるよ！」と声をかけてきた。見ると、昨日取材していただいたばかりの内容が、すでに記事になっているではないか。この素早さには驚いた。しかも、地方欄で一番大きなスペースをとっていただき、照れくさいやら恐縮するやら。ありがたい話である。

この日は、伊セさんゆかりの地を、車で案内していただいた。



伊セさんが働いていた金松楼跡 ↑



旧網走駅跡 ↑ →



伊セさんが網走市に渡ってからなにかと親切にしてくれた島田待合跡あたり



← イセさんがタバコ屋を営み住んでいた跡。門は当時のまま。



能取岬 ↑ →



中川記念武道館 →
現在は閉鎖されていた。



← 中川家が所有していた
牧場跡あたり



← 中川稲荷神社
(現在の場所は移籍された
所)

北浜駅 →





『北浜辺りの海岸に米軍が来ると思う。
イセは腰巻一枚になって馬にまたがり大声を出して海岸線を走るといふ提案をした』

中川イセ半生記「岬を駆ける女」に書いてあるシーンの海岸線あたりだと思う。

イセさんが能取の岬の風にあたり、その場所に居たという場所をめぐり、その感覚を肌で感じ取り、私の中に熱いモノがこみあげてきた。

No.6 『いせの里をたずねて』

ゆかりの地のしめくくりとして、イセさんのお墓参りをさせていただいた。

最初、お墓がなかなか見つからなかったり、お線香になかなか火がつかなかったりと、ハプニングはあったが、ようやくイセさんにご挨拶ができて、ほっ。

いい作品をつくりますと、しっかり、お約束させていただいた。

お昼は、名物のおそばを食べようとお店に入った所、ほぼ満席の盛況。そのせいか、待てど暮らせど、注文したお蕎麦がやってこない。最初は、「はやってますねえ」「奥にも部屋があるんですね」なんて、のん気に話していたのだが、時間は刻一刻と過ぎ、午後の予定が近づく。

結果、「もしまだ作っていないなら、キャンセルにしましょうか」と相談しはじめたころ、ようやく出てきた。そのあとはもう必死。

ワカサギの天ぷらとおそば、岩ガキのおそば…

それぞれ味わって食べたい逸品を、10分あまりでかきこんで、車へと走ったのだった。ああ、もったいない！



さて、その午後は 中川イセさんが理事長を務め、のちに利用者として入居していた 社会福祉法人愛育会いせの里を訪問させていただいた。

ゆったりと広い空間に、明るい館内。

部屋に案内していただく途中も、勤務されているみなさんが、笑顔で気持ちのいい挨拶をしてくださる。

いい雰囲気施設の施設だなあと感じながら、部屋に入ると、いせの里・潮見保育園理事長 小川武さん、園長さん、事務長さんをはじめ、当時、「愛育会」でイセさんとお仕事をなさっていた方々が、ずらりと集まってくださっていた。

ここを建てるきっかけは、当時関わっていた高齢者施設で、運営をめぐる意見の食い違いがあったこと。イセさんは、すでに80歳を越えていたが、「わかった。では、自分が特老を作ってやる！」と辞めたのだそうだ。

ここでも、幼い時から持ち合わせている反骨精神が頭をもたげたのだ。そしてその熱意と情熱がまわりを動かしていく。

ただし、同じ市内で2つの高齢者施設というのは、当時は一般的ではなく、まずは私立法人の保育園を作ることになったそうである。

80歳を過ぎても、運動会で、園児たちと一緒に走っていたというイセさん。気力も体力も並みのものではない。

また、保育園を卒園する園児たちひとりずつに、貯金通帳をつくり、卒園式の時に渡したそうだ。

お金に苦労したイセさんらしい、心づかいではないだろうか。それは、亡くなるまで続いたそうだ。

「困っている人の為には、どうしたらよいのか？」

「行政が出来ない事を民間がする」

イセさんのなかには、自分を救ってくれた網走市に、恩返しをしたいという思いがあった。

その思いが結実し、やがて福祉と医療が一体の施設ができあがる。それがこの「いせの里」なのだそうだ。

集まってくださった方々は、身近にイセさんを感じていたひとたちだけに、みな、嬉しそうにイセさんのことを語ってくださった。



「イセばっちゃんは、絆を大事にする人だったよ」

「親からもらった身体は100年もつというのが、口癖だった」

「欲がなく記憶力がすごい人だった」

「人権擁護委員に女性を登用するようになったのは、イセばっちゃんのおかげ、これは全国的にだよ」

「言葉を飾るわけではないのに、心にズシッとくる話をしてくれた」

そんな思い出話のあいまにも、豪放磊落なイセさんの姿が浮かび上がる。

「イセの里を創る時、資金が全然なかった。でも、ばっちゃんが『オレがやると神風が吹くんだ』と言って踏み切った。そしたら本当に何とかになって、ここが建設されたんだ。」

「この山の上の方にダンスホールがある高齢者住宅を作りたいて、100歳近い時に言っていたんですね」



ああ！！どこまですごい人なんだ！

網走までやってきて、あらためてそのことを思い知らされる。いや、ひるんではいられない。

私の中に、そのイセさんを演じきる決意が、ふつつつと湧いてくるのだった。

No.7 『網走市前市長にお会いする』

この日の夕方。「いせの里」を後にして、今度はセントラルホテルへと向かった。

そこでお会いしたのは、なんと、網走市前市長の大場脩氏だった。2004年（平成16年）、網走市と天童市は友好都市（観光物産交流都市）になっているのだ。

そのきっかけが、2002年7月に、天童市で開催された



「天童が生んだ女性展」で、そこで、網走市名誉市民だった故・中川イセさんが紹介されたことだった。

これに招待を受けた大場市長（当時）が、天童市を訪問された

際に、遠藤登天童市長(当時)から、今後の交流について申し入れがあり、そこから、翌年11月に開催された天童市農業まつりに参加するなど交流を行い、2004年4月に、「観光物産等相互交流協定書」が結ばれたのだ。

セントラルホテルのゆったりしたコーヒーラウンジで、大場前市長さんから見た、イセさんの印象をうかがった。



「大きな声で、自信をもって話す人だった」

「話がうまかった。その場にふさわしい話のできる人」

「礼儀を重んじた」

「弱い人の味方だけれども、弱い人は嫌いだった」

「生きる哲学をもっていた」

そして、イセさんがいなければ、天童市とは、友好都市にはなっていなかっただろうとも…。

ちなみに大場前市長さんは、何度も山形を訪れてくださっていて、そのつど、山形の味に舌鼓をうたれたそうである。

そしてお酒は、「雪漫々」（ゆきまんまん。出羽桜酒造）がお好みらしい。

ちなみに「雪漫々」とは、禅語で『醜物も美しい物も覆い尽くされた雪の下には全てが平等である』という意味だそう。

誰にたいしても、平等に接したというイセさんのイメージをそこに寄せるのは、強引すぎるだろうか。

そういえばイセさんも、お酒には強かったらしい。

御職（遊廓のトップの娼妓）時代に、お客様に、どんどんお酒を飲ませるのだが、本人までどんどん飲んで、体がまいってしまう。そこで、糸を奥歯にしばっておいて、廁に行った時に、口からこの糸を引っ張ってお酒を戻していた。という豪快な逸話がある。

いや、それは、いつもどんな時にも、どうやったらうまくいくかと、何かしら工夫するイセさんの知恵だったのだ。

実際、遊廓の女性たちは、その過酷な労働と不摂生な環境から、体をこわすものも多かった。

一刻も早く借金を返し、ここを出ていこうと考えていたイセさんにとっては、自分にできることはどんなことでも実行しようという気持ちだったんだな、と想う。

考えるのが面倒くさくなると、すぐに挫折してしまう私としては、恥ずかしいかぎりである。

「生きる哲学」

まさにその言葉そのものが中川イセさんなのだ。

No.8 『網走市現市長を表敬訪問』

網走滞在中、1日目、2日目、そして3日目の昼まで、雪はまったく降らず、天気はずっと快晴。実際、路面もかわいた状態で、「今年は、まるで(雪が)降らないねえ」と、会うかた会うかた、口をそろえて言われていた。

それが、3日目の昼から降り出した雪で、あたりは一面の雪景色。ふたつの網走の顔を見せてもらった感じで、これ



もイセさんのはからい…と想うのは、調子がよすぎるだろうか。でも、本当に、そんなふうに思いたくなるくらい、絶妙なお天気だったのだ。

網走取材旅行最終日の朝は、薄化粧のような雪が地面を覆っていた。

この日は、実は、一番緊張する日。というのも、水谷洋一網走市長とお会いすることになっていたからだ。日ごろ、お役所関係には、とんと縁のない私。前日も、前市長にお会いして、それだけでときどきしていたのだけれど、この日は現市長なので、さらに緊張…というわけだ。

でも、今回、ありがたかったことがある。

今回の取材旅行の発端は、イセさんと面識のあった天童市の元市議会議員さんに、後押しをしていただいたこと。

そんな関係で、取材旅行の前には、山本信治天童市長にもお会いすることができ、取材のために、網走を訪問することをお伝えしていた。

すると、「せっかく網走に行くのであれば、網走市長さんともお会いしてきたらいい」と言ってくださり、山本天童市長さん自ら、連絡をしておくからとおっしゃって下さったのだ。

でなければ、今回の表敬訪問は、実現しなかったろう。



網走市役所は、思ったほど大きくはなかったけれど、玄関にかかげられた木彫りの看板は、どっしりとした風格を見せていた。思わずその前で、記念写真。

待ち合わせ場所である、市長室そばのソファにすわると、すぐに、網走市教育委員会社会教育部長である、後藤伸次さん

がいらして、名刺交換。さらに、このかん、ずっと私たちをサポートしてくださった、網走監獄博物館館長の鈴木雅宣さんも駆けつけてくださって、一同で、いよいよ市長室訪問である。

顔ぶれは、水谷市長、教育委員会教育長・木目澤一三さん、社会教育部長・後藤さん、社会教育課長・吉村学さん、網走博物館館長・鈴木さん、脚本のかめおかゆみこさん、そして、私。

水谷市長は、若々しくフレンドリーな雰囲気漂わせたかたで、終始気さくな笑顔で、私たちを歓待してくださった。ちなみに経歴を拝見すると、水谷市長と私は、数歳しか変わらない。

その水谷網走市長さんが、にこにこしながら、こんな思い出を語ってくださった。

「中川イセさんとお会いしたのは、私が（武部勤衆議院議員の）秘書をやっていた時でした。その時に言われたのが、『政治をやるんだったら、マージャンだけはするな』と。なので、私はいまもってマージャンはやらないんですよ」

イセさんが、何を思ってそんなことを言ったのかは、想像もつかないが、それを素直に受け入れる水谷さんも、ピュ

アな心の持ち主なんだなあと想像した。そして、ここからいよいよ核心の話。

今回の作品、どうしても初演は網走でおこないたいという思いがあった。

イセさんは、『天童は私を産んでくれた場所、網走は私を育ててくれた場所』と言って、最期は網走に骨をうずめたのだ。

初演は、なんとしても網走でなければならないと。

それは、実際に網走を訪問してますます強い気持ちになったし、取材先でお会いしたかたがたは、みなさん、賛意を示してくださり、背中を押してくださった。

ここは、できたら、具体的なことまで話を進めたい。（網走で公演をやりたいという話は、事前に伝えてあった）

一番ネックになるのは、なんといっても予算である。今回の語り劇を上演する場合、演者である私のほか、演出、音響、照明など考えると、4～5人体制で動くことになる。

かつて、ひとり芝居を地方公演したときには、10人編成で動いていた。それに比べれば予算は軽減できるが、それでも、準備と移動のために、かかるものはかかるのだ。

それを、誰がどのように采配していくか。

とはいえ、まだ脚本もできていない段階。

予算にしてもざっくりとしたことしか伝えられない。

「本当だったら、一本の舞台をつくるには、百万はかかります」ということばが、喉もとまで出かかったが、緊張のうえに遠慮が加わり、とうとう、その場では口には出せなかった。なので、いまさらだけれど、ここに書いておこう。
(笑)

それでも、私たちの意を汲んでくださって、網走での公演実現に向けて、積極的に動いていこうという話にはなった(ほっ)。

窓口も、社会教育課長の吉村さんということに決まり、今後、具体的な話は、吉村さんをとおしてやりとりさせていただくことになった。

市長室を出ると、地元の「網走タイムズ」と、地域の日刊情報紙「経済の伝書鳩」のかたが、取材のために待っていてくださった。

「網走タイムズ」の伊藤敏治さんは、イセさんに何度もお会いしたことがあるそうで、取材のかたわら、なつかしそうに、思い出話を語ってくださった。

ここでも、イセさんが「生きている」のを感じる事ができた。

No.9『どこの馬の骨だ』

その後、「公演をするなら、ここはどうか」という会場も見せていただいた。網走川の河口付近にある、オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）。



図書館も併設された、おおきな会場である。

市のさまざまな催しの際にも、使われているのだという。

客席は456席。語り劇をするには、ちょうどよい広さである。実際の舞台も見せていただき、舞台機構についての説明も受けた。

舞台に立ってみると、もう、すでにそこで演じている感覚になって、気持ちが高揚してくるのがわかった。(役者ですから…)

そして、こころのなかで、「イセさん、私、絶対に実現させますから！」と心に誓って、会場をあとにしたのだった。

このあと、かめおかさんはご実家に戻られた。

私のほうは、「せっかく網走市にきたのだから」と、博物館館長の鈴木さんに、「網走監獄」の中を案内していただくことになった。

博物館「網走監獄」ではまず、食堂に案内していただいた。



「ここのでんぶん団子、おいしいんですよ。おなかの足しとしては、おやつくらいにしかならないかも知れないけれど」

後でかめおかさんに聞いたところ、こちらでは、でんぶん団子は、定番のおやつのひとつなのだそうだ。

この時、私は、ずっと思っていたながら、聴けずにいたことを、思いきって聴いてみた。

「あの…、どこの馬の骨かわからない私たちを、こんなに歓待して下さった理由は、何なんでしょうか？」

「今さらこんな質問をしてよいのだろうか？」という気持ちも交錯しての、おそろおそろの質問だった。

実際、どこに伺っても、そう聴きたくなくても不思議のないほど、手厚い歓待だったのだ。

ちなみに、「どこの馬の骨の…」というのは、取材をするなかで、ひとりの方が言われたことばだ。

「イセばっちゃんに初めて会った時、いきなり『おまえどこの馬の骨だ？』と言われたんだ。でも、それで、なにくそって思って頑張ったら、認めてくれて、最後にはすごく面倒をみてもらった」

その方は、そんなふうに語られたのだ。

いま、ここにいる自分も、それと同じくらいの「馬の骨」レベルじゃないだろうか…。そんな気持ちがあったものだから、つい、そのことばを使ってしまったのだ。

ところが、言った瞬間、私のなかで、忽然とある思いが湧きあがってきた。

鈴木さんの答えを待たずに、私はまた聴いた。

「中川イセさん…だから…ですか!？」

鈴木さんは、笑顔でひとこと、「そうですね」とお返事をされた。

その瞬間、私の中に、熱いものがこみあげた。

中川イセさん…。

「ばっちゃん」と呼ばれ、愛されたイセさんが、今も生きている。肉体はこの世にないのに、かかわった人たちの中に生きている!

ありがとうございます。ありがとうございます。

一度もお会いしたことのないイセばっちゃん。あなたのおかげで、あなたが生きた町で、私たちは、こうして気持ちよく取材をさせていただいている

本当に、感謝しかいいようがない…。

私たちにできること。

それは、中川イセさんという存在を、舞台をとおして、もう一度、この世で輝かせること。

死してなお、うしなわれることのない、イセさんの想いを、多くのひとに伝えていくこと…。

No.10 『中身がないとダメだ』

この後、学芸委員の今野久代さんに、館内を案内していただいた。久代さんは、実は、イセさんと血のつながりをもっている方だ。

イセさんの実の父親は、イセさんのお母さんと結婚する前に、別の人と結婚していて、すでに娘がひとりいた。イセさんにとっては、異母姉妹にあたる。そのお姉さんの血筋にあたるのが、久代さんなのだ。

博物館内には、大型のスクリーンがあって、開拓当時、囚人たちの働きによって、この地域の道が開かれていった話などを見ることができた。

そして、このスクリーン導入の企画を立てたのが、この久代さんだという。

初日にお会いしたときから、才気を感じる人だと思っていたが、これは、イセさんのお父さんの血つながりかも、と感じてしまった。

イセさんのお父さん・安蔵さんは、興行師として采配をふるった。いわゆる「やくざ」ものではあったけれど、時代

がちがえば、もっとまっとうに活躍できたひとなのかもしれない。

私は、館内の説明より、イセさんのことをもっと聴きたかった。けれど、丁寧に説明してくださる久代さんの好意を無にするのも悪い。そこで、館内の施設から施設を移動する時間を使って、質問をしていった。

久代さんは、あるかぎりの記憶をたどって話してくださった。

「女はね、かわいい方がいいんだ。きれいにしていると、旦那さんも喜ぶ。だけど、中身がないとダメだ。表だけ着飾っても中身がないとダメだって…、強く言ってましたね。そしてその中身を磨くのは、日常なんだとも」

久代さんは、イセさんが財団理事長をされていた時代に、秘書をされていた体験ももっている。

「講演会とかで話す文章は、私が書いていたんですよ。でも、書かせるくせに、一度もそれを読んだことがない。内容も変わってるし(笑)。だったら書かせなくても…って、思うんですけどね」

なんとも不思議な話だ。実際、イセさんは、講演や講話の際には、いちいち原稿を見るのではなく、その時その時の自分のことばで語っていたようだ。

でも、そのおかげで、久代さんも相当きたえられたのではないだろうか。もしかしたら、イセさんは、そんなふうにして、人を育てていたのかな。そんなことをふと思った。

久代さんはまた語る。

「私、天童にも何回か行ったことがあるんですよ。イセばっちゃんが最後に天童に講演で行ったころかな、白装束を持ち歩くようになりましてね。まあ、90歳も過ぎていましたからね。どこかで覚悟していたんでしょうね」

「そうそう。ある時、イセばっちゃんが付けていた指輪を私にくれるというんですよ。けっこう高そうなものだったんですけど、指のサイズが合わないの、私、いらないうて言ったんです（笑）」

私は思わず、「えー、もったいない。私なら合わなくてももらっちゃうな（笑）。そしたら、イセさん何て言ったんですか？」

残念ながら、久代さんのお返事は失念してしまった。

でも、その後、イセさんは、お店で新しい指輪を買って、久代さんにプレゼントしてくれたそうだ。

「それが、私にとっては、ばっちゃんの形見かな…」

久代さんの声が、心なしか、しんみりしたように聴こえた。それにしても、久代さんのしっかりしたお話と、確かな眼差しの中に、「やはり、イセさんと血のつながりのある人だな〜」と感じずにはいられなかった。

そうして、この人もきっと、「いやなものはいやだ！と言える人なんだろうな」などと、勝手に、若かりしイセさんのイメージを重ねていたのだった。

久代さんの丁寧な案内のおかげで、網走の印象がすっかり変わるのを感じた。正直、網走といっても、これまでは、北海道・寒い・遠い、高倉健さんの映画…というイメージくらいしかなかった。

けれども、この酷寒の地で、網走の町がつくられていく過程には、囚人の人たちのおおきな働きがあったのだ。そのことを知って、私はとても感動した。

イセさんは、博物館の理事長をしていた時に「囚人の人たちさ、感謝さんなねんだ」と、いつも言っていたそうだ。

本当に、イセばっちゃんは、どんな人だろうが、どんな状況だろうが、その人の良さを見ぬき、よい状況に転換していく人だった。

そして、生きていること、おかれている状況に感謝をして、いつも前を向いて歩いてきた人だったのだ。

「人間はな、百年生きられる身体を親からもらっているんだよ。それを生かすのは、自分自身」

105歳まで、頭、身体、心を全部使って生き抜いた、イセさんのことには、ずっしりとした重みがある。

まるで、『人間のモデル』のような人だなと、思ってしまったほどだ。

鈴木さん、久代さん、博物館のみなさんに礼をして、博物館の外に出た。

みごとな青空で、初冬の太陽がまぶしく光っていた。まるで、私たちの話を、イセさんが空で聴いていて、「何しゃべてんだ」と笑っているような気がした。

そして、「夢実子さん！ 最後までがんばれ！」と、応援してくださっているような気がして、勇気が湧いてきた。



かめおかさんのお父さん、お母さんにも大変お世話になった。

帰りに、お母さんが自ら焼いたふわふわのパンと、私が「んまい、んまい」と言っ
て食べたお手製のからし味噌を、お土

産にもたせてくれた。

そして、来るときと同じく、かめおかさんのお父さんが、私たちを空港へと送ってくれた。

すべてのかたに、感謝、感謝、感謝あるのみである。

あっと言う間の3泊4日の網走取材旅行を終えて、無事に山形に戻ってきた。

これからが、スタートである。
ゼロからの舞台づくりは、簡単なことではないけれど、
何があってもへこたれず、常に前を向いて進んでいこう。
みんなに喜んでもらえる
語り劇「中川イセ物語（仮題）」を創っていこう。

イセばっちゃん、見守っていてください。
私、がんばりますから！

No.11 番外編『おら負けね』

後日談。日々、イセばっちゃんの事を考えていた私に、降りかかってきた「事件」の話である。

イセばっちゃんとの出会いを経て、私は、私の「ありがた」が、以前とは明らかに違っている事を感じている。そんな事を示すエピソードだったので、最後につけたしておく。

2015年1月6日のこと。

「ほだなでよく免許とたもんだ！」
(そんなのでよく免許をとれたものだ)

「ゆぎどがせば、通れっべ！」
(雪をどかせば、通れるだろう)

その男性は罵声を私に浴びせながら車を移動した…。

私の家は、幹線道路から少し奥まった所にあり、もともと道幅が狭いために手前にあるA家にお客様の車が止まると、入って行きにくくなることがしばしばあったのだ。

生身の人間なので、その荒げられた声に怒りの感情がこみあがってきた…。

しかし、そんなことに対して無駄なエネルギーを使ってしまふのは時間ももったいないので、にっこり微笑み大声で「ありがとうございます！」と、礼を述べた……。

が！！！！

私の感情はやはり抑えられなくて……！

何か一言いわなければおさまらない感情が湧きあがってきてしまった。

『理由を聞きにいこう！』と思った。

なぜならば、2日前にも同じ事があったのだ。

そして実は、数十年前からしばしば繰り返されてきたことだったので。

そのA家の客人の男性は、私にも、我が家にもかかわりの無い人なのだが、いつのころからかこの方が車を停めると、道が通りにくくなり、よけてくれるようお願いしては、怒鳴られるというパターンが続いていたのだ。

さて、お礼を言いがてら、とは言っても私の感情は怒りと怖れと不安のまじりあった平常のモノとはあきらかに違う。

そして、ドキドキしながらも玄関をあけ、なるべく動揺をみせないように「先ほどは、ありがとうございました」と。

その男性は玄関に背中を向けて座り、お茶を飲んでいて、私が声をかけても振り向きもしない。

A家の住人であるご夫婦は、ちょっと困ったような雰囲気を見せながらも、平常心をよそおって私を見ている。

私はなおも、その客人の男性に話しかけた。

「すみません、私、おじさんに何か悪い事をしたのでしょうか？」

「何か悪い事をしたら謝りますから、なぜあのような事をするのか教えていただけますか？」

男性はあいもかわらず、背中を向けながら

「ほだなでよく免許とたもんだ！」

(そんなのでよく免許をとれたものだ)

「ゆぎどがせば、通れっべ！」

(雪をどかせば、通れるだろう)

と、同じような言葉でどなっている。

私「車にぶつかってしまったら申し訳ないので、車を移動してくださいってお願いしているんです」

男性「ほだごどなたら、お前さ弁償させる！」

（そんな事したら、弁償してもらうからな）

なんだか意味がわからない返答やらがあり、私が理由を聞きたいというのとその男性の同じ言葉の繰り返しが数十分続いた……

と、こんな事件があったのだが……。

ここからが本題です（笑）

以前の私だったら、心細いのと、怒り爆発状態でその自分の感情をおさめられなくなって、

なぜ、こんな事をされなければならいのだろうか？

相手をどうやって懲らしめられるのだろうか？

こんな環境に家があるせいだ！

こんな所に家を建てた両親やじいちゃんたちのせいだ！

こんな状況に遭う私って、なんて不幸なんだろう！

なんで、私は言い返せないのだろうか！

こんな私の性格で産まれてきたせいだ！

私なんて……。

くやしい！くやしい！くやしい！と、

怒りや恨みや悔しさのどろどろの、どつぽにすっぽり嵌ってしまってその事に無駄な時間を費やしていたと思う。

つまり、心の無駄なエネルギーを使っていた。

それが、今回はなんというか、目線が違っててもでもいうのか、怒りも悔しさもあったのだが、もうひとつそこに、

『何の為に』が、あったのだ。

『何の為に』私はその理由を知りたくて、あえて、おじさんに話を聴こうとしてしていたのだ。

そして、その理由を聞くまででこでも動かないぞ！という私がいたのだ……。

あっ！中川イセさんってそういう人だったのか！

瞬間、そんな気持ちが湧きあがってきた。

天童市出身。我が子を育てる為に自ら北海道の遊郭に身を売り、その後、不屈の精神で自立したのち、網走市議を7期務め、数々の業績を残された方である。

まだ、脚本も完成されていない段階だけれども、私の頭の中では、すでに役作りが始まっている。寝ても覚めても私はイセさんの事を考えている。

そのイセさんが、この時突如として私の脳裏に浮かびあがってきたのだ。

納得するまで引き下がらない！

自分が『大切』だと思ったモノを獲得するまで！

頭を何度も下げようが、屈辱的なことを言われようが。

そんな事を気にする人ではなかったのじゃなかろうか……。いや、気にはするだろうけれども、自分の感情にも、他人の感情にも翻弄されないのだ！

答のでない無駄な時間をつかわないのだ！

私なんて、へたなプライドが出てきて、くやしくて、くやしくその自分の感情をコントロールできなくて、そしてその渦からのがれられなくなって……。

でもイセさんは、小さい頃からいやなことがあっても、そればかりを考えていると頭が痛くなるので、他のことに頭を切り換えていたという。

切り替えがはやいのだ！

その持って生まれた、切り替えの素早さが、後年イセさんの人生にさまざまな恩恵をもたらすことになる。

あ～～そ～いうことか～！！

今回のこのおじさんの登場は、私に中川イセさんの役をするにあたり、その想いを体験させてくれたのだ……。

そして、

私が人間としてどのくらい成長しているのか、試されたのだ。天に。いや、もしかしたら、イセばっちゃんに。

「今回のこの状況に対して、お前はどのような行動をとりどのような思考をするのだ」と。

反骨精神の強い中川イセさんは、「弱い者の味方だったけれども弱い奴は嫌いだった」と、先月の網走取材旅行に行った時に教えていただいた。

「なぜ？」ではなく、「どうしたら」なのだ！

そんな事を想いはじめたら、その男性は、「わざわざ憎まれ役」をかけて出てくれたのだ。それも私を成長させる為に！

感謝だ～！ありがとう～！！（笑）

おら！負けね！

ふっとそんな言葉が降ってきた（笑）



No.12 番外編『かめおかゆみこさんのメルマガ』

※かめおかゆみこさんの特別寄稿。私のブログでの連載に触発されて、書いてくださったとの事です。完全日刊メルマガ「今日のフォーカスチェンジ」第4105号(2015年1月27日発行)を転載いたします。

『弱いひと』

2007年、105歳で大往生した「中川イセ」さんの生涯は、実に筆舌に尽くしがたい。いわゆる「ヤクザもの」の父と、病弱な母とのあいだに生まれ、2歳足らずで母は病没。里親にあずけられるも、父親はびた一文、養育費をはらわず、学校では、男の子たちに集団でいじめられ、教師にも不当な扱いを受け…と、子ども時代だけでも、何十回ザセツしても、おかしくない体験をしている。

そして、17歳で子どもを産むことになり、その子を育てるお金を捻出するために、遊廓ではたらくことを決意…と、その後も、波瀾万丈を絵に描いた…ではすまなくて、映画化したような(笑)人生を展開する。

いま、そのイセさんの生涯を、「ひとり語り」にするために、脚本を書いているのだが、先日、ある脚本研究会にもっていったら、「朝ドラならこういう展開、あるよね」と、

冗談半分に言われたほどだ。つまり、フィクションなら、よくある展開だということ。

しかし、それをリアルに体験し、かつ逆境をはね返して生き抜いたのが、イセさんなのだ。

と、前置きは長くなったけれども、後年、市議会議員にもなり、さまざまな業績を重ねたイセさんのことを、まわりのひとは、さまざまなことばで語る。

そのなかのひとつ。

「弱いひとの味方だけれども、弱いひとは嫌いだった」

このことばには、深い重みがあると想う。

弱いひと、とはどういう意味か。解釈はいろいろあるとは想うけれど、自分で自分の人生を、切りひらく意思をもたないひと、あるいは、自分の人生の責任を、ひとに転嫁してしまっているひと、ということが、言えるのかなと想う。

生きていれば、ときに、弱い立場におかれることはある。

イセさん自身がそうだった。それはそれで、しかたのないことだ。でも、弱い立場であっても、そのまま、弱いひと

になってしまう必要はない。どんな状況であっても、やれることは必ずある。必ずあると信じたとき、ひとは底知れぬエネルギーを感じる。

自分のうちがわに眠っている、これまで使ったことのない、そんなエネルギーが湧き上がってくるのだ。そして、このエネルギーは、平時にはなかなか発動しない。

逆境をバネにして、目覚めてくることも多いのだ。

もちろん、誰でもかれでも、逆境を体験しなければならない、ということは毛頭ないが、もしも、自分は無力だとか、何もできないと想っているひとは、もしかしたら、そのうちなるエネルギーが燃え上がるころまで、落ちた体験がないのかもしれない。

底だ、底だと想ってきたのは、実は底ではなくて、途中の踊り場にすぎないのかもしれない。だったら、怖れずに、一步を踏み出してみよう。

ひとは、踏み出してはじめて、気づく。その一步を踏み出すことが、自分のうちなるエネルギーに、アクセスする方法だったのだと。

自分を、弱い、無力だと想っていたのは、ただの思いこみで、本当は、弱い自分しか、見えていなかった…、もしくは、見ようとしていなかっただけなのだと。

さて。あなたは、いま、自分は逆境にあると想っているだろうか？

あるいは、弱い立場、苦しい状況におかれていると、感じているだろうか？ だとしたら、いま、とてつもないチャンスにいるのかもしれない。

あなたの底知れぬパワーが、むくむくと目覚めてくるチャンスに。

ありえないと想うようなエネルギーが、噴き出してくるチャンスに。

どうぞ、お楽しみさま！

そこから、どう生きるかは、あなたの自由なのだから！

夢実子（ゆみこ） 俳優・ワークショップリーダー・東北文教大学非常勤講師・企業研修講師。出演に映画「おしん」ほか。ラジオドラマ「オリオン星の歌～月山に生きる宝」で、日本民間放送連盟コンクール北海道・東北ブロック優秀賞。

ホームページ <http://yumiko333.com>

※芸名の“夢実子”の名前は2012（平成24）年2月より使用。過去、蟹座芳、今田弓子、渾田由美子、今田裕美子の芸名を使用していたこともあるが、現在は、『夢実子（yumiko）』に統一。

かめおかゆみこ 脚本家・ワークショップリーダー・演劇指導者。著書に「演劇やろうよ！」「演劇やろうよ！指導者篇」。「月が見ていた話」で晩成書房戯曲賞。日刊メルマガ「今日のフォーカスチェンジ」連続発行11年超。ホームページ

<http://kamewaza.com/>

「イセばっちゃんをたずねて～網走脚本取材旅行記～」

発行・編集 オフィス夢実子（代表 今田由美子）

編集協力 かめおかゆみこ

発行年月日 2015年2月11日

〒994-0054 山形県天童市荒谷 2642 番地

電話：023-658-7061 メールアド：yumiko@yumiko.com

HP：http://yumiko333.com